

狼の楽園

「英国政府は、それは『法と秩序』の問題であるとか、国内的な不穏とか、単なる紛争にすぎないとか我々に言い続けているが、私にとってはそれは最初から戦争状況だった。なぜなら窓から外を見ると、私が見るものは窓に銃を向けている英兵であり、私が洗濯物を干しに裏庭に出ると、隣の家の庭には英軍の戦車が座り込んでいて、その砲塔が私を追いまわして回転している。……私はそのような状況を『法と秩序』の問題と考えることはできない。私にとってはそれは戦争であった」

パンフレット『イギリスの解決はごめんだ』

ACT . 4 LOW AND ORDER

激情にも似たものが胸中を駆け抜けたのはほんの一瞬だった。それは朝もやのように不確かで、その正体を私につかませぬうちに跡形もなく消え失せていった。

現実に立ち戻った私の目の前にはただ、二つの琥珀色の瞳があるだけだった。諦念と憂いに満ちた 私が幾度となく見てきた、あの目つき。

再び胸を何かが満たしはじめた。

その所以は知らない。先程の「なにか」と関連があるのかもどうかも知らない。

だが、それが何かだけは、今度ははっきりと分かる 不快感だ。

少女は見た目だけで人を不快にさせるにはあまりに美しすぎたし、（我が愛しの低能妖精のように）ぶしつけな振る舞いをしたわけでもない。

にもかかわらず、私は目の前の黒髪の少女の瞳を見つめながら、この上なく不快な気分になっているのは事実だった。

『か、影の民よ……この娘、影の民だわ』

いつのまにやら浮遊を再開したフィリーが耳元でささやいた。

「………何だ、それは」

視線を琥珀色の瞳からそらさぬまま、フィリーに問う。

「あんた知らないの！？ 幽霊とか霊魂とかと会話したり、人の死期を感じ取ったりできる不気味な連中のことよ」

今度は、ささやきというには、あまりに声が大きすぎた だが、それが聞こえているはずの黒髪の少女は、眉ひとつ動かさなかった。

私は唇をゆがめた。

ようやく、このゲットー……… “まじない通り” にふさわしい人物の登場と相成ったわけだ。別にどうということはないのに、いかがわしい風聞によって忌み嫌われる異民族。いたこの真似事ができるかどうかはさておき、確かに少女の容貌は際立っていた。

今まで私がこの世界で見てきた者達 コーカソイドと思われる人種が主流であろう

この世界で、この少女（“影の民”とやらがそうなのだろうが）は明らかにモンゴロイドの風貌をそなえているのだ。これだけでも、充分に苛められる理由になる。どこの世界であろうと、人間というものは排他的で偏狭なのだ。

その上靈魂うんぬんといった薄気味悪い『伝説』までしよわされては、差別の対象とされない方がおかしい。

案外、私がここで暴力的手段によってこの少女の純潔を汚しても、官憲に追われたりすることはないかもな。次第に高まっていく不快感をおぼえながら、私はそんな不埒なことを思って笑った。追記　私は不快な時ほどよく笑う。

第二ボタンまではずしたボタンダウンのシャツ（先だつての格闘ですでにしわくちゃになっている）の襟元に顎先をうすめ、くすくす笑い続けている私を気味悪げに見ながら、フィリーが耳元までただよってきて、ささやきかけた。

「ねえイアン……もう行こうよ。この娘に関わってもロクなことなさそうだし……」

先程よりは小声だったが、黒髪の少女にはまたしても聞こえてしまったろう　先方はやはり何の反応も示さないが。

声をかけられたが、フィリーを見ようとはしなかった。その声も、耳障りな羽音も、私の中の得体の知れない不快感を増大させただけだった。

「お前に関わる以上に、ろくでもないことがこの世にあるってのか？」

投げやりに吐き捨てた。

妖精は一瞬きょとんとしていた　たぶん、私の言葉を解しかねたのだろう。だが、すぐに（矮小な脳にふさわしからざる賢明さで）その意味するところを悟り、真っ赤になってわめきちらした。

「なななに言ってんのよこのトンチキ！　誰のせいであたしがこんなに苦労してると思ってるの！？　そいつはこっちのセリフよ！！」

ラウドスピーカー並の大音量　それも耳で！　先程の不快感もどこへやら、私は頭の横にただよう妖精への殺意を抑えることに全精力を傾注しなければならなくなった。

そんな私をよそに、妖精はなおもわめき続ける。

「だいたいアンタ知ってるの！？　影の民は不幸を呼ぶって有名な話なんだから！　こんな得体の知れない連中に関わるなんて馬鹿よ馬鹿！！　あたしがわざわざ心配してやってんのにアンタときたら……」

私はそこでフィリーを地面に叩き落とした。わめき声に耐え切れなくなったのではなく………激情した妖精の言葉はいささか目の前の少女への礼儀を欠いたものになりつつあったからだ。

何にせよ、もめごとはごめんだ　私が考えたのはそれだけだった。とにかくこの場を切り上げ、不快感の源であるこの少女の前から姿を消したかった。

本日二度目のパラシュートなし自由落下を敢行したため、地べたで完全にのびている妖精を拾い上げると、私は黒髪の少女に謝罪を始めた。

「いや、しつかけの悪い妖精で大変申し訳ない。よく言って聞かせておきますので、今日のところはお許しいただきたい」

口早に言った。丁寧な日本語なんか本当に久しぶりだったので、妙な言い回しになってしまった。

私の謝罪にも、少女は相変わらず表情を変えなかった。

「気になさることはありません」

感情のこもらない、静かな声　口もほとんど動いていない。なのに、その言葉の一つ一つが、はっきりと私の耳の中で響く。

「その妖精の言う通りです。私達は影の民。不幸を招く存在……全て本当のことですから」

抑揚のない声でそう告げると、少女はきびすを返した。まるで、この路地で何者にも出会わなかったというように。

だが、私は見てしまった。

あくまで無関心を装おうとする、少女の琥珀色の瞳の中にある、名状しがたい悲嘆いかに隠そうとしても、それは見えてしまった。それを無視するには、私は少女の瞳の中にあつたものをあまりに見すぎていた。

頭の中で、時間が逆流していく

サウスアーマーでパトロールにあたる私達を、地べたに座り込んで見上げる失業者達の目。クロスマグレンの市街をサラセン装甲車で轟進する私達を、窓から見つめる女たちの目。あるいは、潜入した私達に情報を売る、カーゾン・ストリートの男に飼われたタレ込み屋の目。

私はあまりに多くその目を見すぎていた　諦観、憎悪、媚びにいろどられた瞳の中にある、救いがたいほどの悲哀。

「おい、待てよ」

気づいたら、私は去り行く少女に声をかけていた。先程まで、一刻も早く離れたいと思つた少女に。

「……………何です？」

幸か不幸か、少女は私の呼びかけを無視しなかった。足を止め、少しだけげんそうな顔をこちらに向ける。

その時点で初めて、私は自分が何を言いたくて呼び止めたのかわからないのに気がついた。ただ……………ただ、そうせずにはいられなかったのだ。

自分でも理解に苦しむ行動だった。私がすべきは、あの奇妙な不快感と戦いながらこの娘とおしゃべりすることなんかじゃない。少女同様、さっさと背を向けて歩き去り、絶望的な状況におかれた自己を救うべく、最大限の努力をするべきだった。

頭ではそれは分かっていた　嫌になるほどに。だが、現実には私は会話を継続すべく、少女を呼び止めていた。

立ち止まり、こちらを見つめている少女に向け、歩み寄る。感情を見せない琥珀色の瞳をまっすぐに見すえながら。

本音を言えば、目をそらしたかった。背を向けたかった。だが、私は少女の瞳から、その奥にほの見えるものから、一瞬も目をそらすことなく歩行を続けた。

足を止めた。手をのばせば、ふれられるぐらいの距離で。

「……………怒らないのか？」

やっとのことで思いついた言葉はそれだけだった。

少女はほんの少し眉をひそめ、何か問いたげな顔をした。だが、何も言わない　私の次の言葉を待つように。

息を吸い込む。何かこの場にふさわしい言葉を選ぼうとし……………すぐにやめた。

そんなものはあるわけがないからだ。私は自らの理性を踏みつけにするような行動を今とっているものであり、そこにはいかなる論理も介入する余地がない。私自身、何でこんなことをしているのか、今もって皆目見当がつかないのだ。

だったら、考えたってどうにもならない。ただ、胸にわきあがる、この奇妙な使命感じみたものに従って言葉を発するのみだ　　そう思うと、とまどいは消えた。

今までかたちをなさなかった言葉の一つ一つが明確なかたちをとり、理性のたがから解き放たれて舌を動かしていく。

「あんたは怒るべきだろう。ただ……ただ、違うというだけで、こんなちんけな妖精にまで好き放題言われて。こいつには人のことを言えるような能なんて何一つないのにな」

依然、少女は無言だった。私の言うことをはかりかねている　　顔の造作の（ごくわずかな）動きからして、そんなところだろう。

「何故怒らない？ 何故反論しない？ 何故叩きのめしてでも黙らせない？ しかも、ただ言われてるだけじゃないだろう。この世界の民族問題なんか知ったこっちゃないが、少なくともこの連中は、あんた達を悪しざまを言うだけで満足したりしないだろう。そうだ

迫害ってやつがあるんじゃないのか？」

さらに沈黙。だが、かろうじて分かる程度に、少女はうなずいた。表情は変わらない。顔面の神経に異常でもあるのなら別だが、なかなかどうして、たいした精神力だ。

「だったら何で、それと戦わないんだ。……怖いのか？ それとも、嬉しいのか？ 神の試練だとか何とか言って、迫害されて苦しみもたえる自分達の姿に、酔っている手合いもいるが……あんたもそのくちか？ 苛められるのが嬉しくて、股を濡らす……」

私はそこで言葉を切った　　切らざるをえなかった。何かが高速で、私の顔に向け飛んでくるのを感知したのだ。

回避では間に合わぬと判断した左腕の神経が、エルボブロックを選んだ。直後、かなりの衝撃が私の左前腕を痛撃した。そして肉体の他の部分は、二撃目以降に対する防御と反撃の態勢をとる。

そこまでで半秒たらず。便利といえば便利だが、我ながら呪わしい習性である。

あらためて、私を攻撃した（命知らずの）ハードパンチャーを視認する。拳の飛んできた方向にいたのは　予想どおりではあったが　アルザ一人だった。

赤毛の少女は、顔中を涙で濡らし、子供のように泣いていた。

「やめえ……イーやん、もうやめえ！」

ほとんど絶叫に近い声。私の奇妙な使命感はそれにかき消された。

すっかり忘れていたが、アルザもまた人間ではないのだ。“牙人族”なるものの人口分布は知らないが、出会った時の状況から察するに、この世界においては多数派ではないだろう。そのために愉快ではない事態に遭遇した経験は、今日のあの一件だけではあるまい。

つまり　　アルザは、黒髪の少女に対する私の言葉を、そのまま自分に向けた言葉としてとらえざるをえなかったのだ。

他人に対する思いやりは、むしろ悪徳と見なされる商売についていた私だが、さすがに今回ばかりは自分の無神経さを恥じた。

何とんでも、（身体の発育は抜群に良からうと）アルザはまだ子供なのだ。私の無慈悲な言動を受け入れるほど、寛容にはなれないだろう。

ため息ひとつ。私の激情、私の人生観、私の罪　　とりあえず、横に置いておこう。女の子を泣かしたら、理屈抜きに謝らなきゃならない。昔から、母に厳しく言われていたことだ。

手をのばし、アルザの頭を優しくなでる。奔放にとびはねているヘアスタイルとは裏腹に、その感触はひどく柔らかで、繊細だった。

「悪かったよ、アルザ。いま聞いての通り、私はろくでなしなんだ。弱い者いじめを商売にしていた。しかも、それがずっと正しいことだと信じて、やっていたんだ。……軽蔑されて当然の人間だ」

口にして、驚いた。

私はとりあえず、この場をおさめるための言葉を、思いつくまま口にしたつもりだった。しかし、実際に言葉に出してみると……そこには、ある種の誠意、そして真実というべきものが含まれた告白になっていたことに、自分でも愕然とした。

「嘘や！」

「嘘じゃない。私は人殺しだ。恨みのためでもなく、金のためでもなく、単なる日常の仕事として、うんざりするほど人を殺した」

しゃべりはじめてしまうと止まらなかった。遠い昔に棄てたはずの懊悩が、先程の使命感もどきに代わって私を支配している。

「最初は嫌だった。恐ろしかった。だが、そのうち慣れた。一杯のエールで、殺した人間のことを忘れられるようになった。そして、最後にはそれを楽しむようになった」

アルザは言葉もなく、叫びのかたちで口を開けたまま、震えている。碧い瞳からは、さらに大粒の涙がとめどなくこぼれ落ちた。

「……お話は終わりましたか？」

冷気を感じるほど、静かな声音。私の“告白”はそれで断ち切られた。

振り向くと、黒髪の少女は依然無表情のまま、そこにいた。

「終わっちゃいないさ。だが、今日は仕切りなおした方がよさそうだな」

ちらと、しゃくりあげているアルザの方に目をやる。

しゃべりちらしている時は殺意すらおぼえたが、こんな無防備な泣き顔を見せられては、放っておけない　　私にだって、人並みの保護欲ぐらいはある。

黒髪の少女はしばし無言だった。そして、小さくうなずくと、背をひるがえす。

「待てよ。名前ぐらいは言ったらどうだ？　　俺はイアン」

少女は立ち止まったが、振り返りはしない。

「……楊雲」

ぼつりと、名乗った。北京語読みの名前　　本当にこの世界は何でもありだ。

「そうか、楊雲。……また、顔を合わせることになるぜ、きっと」

楊雲と名乗った少女は、それには応じずに、路地に姿を消した。

『兵隊さん』

たぶん、初めて聞いたモリイの言葉はそれだったと思う。

二十余年前のベルファスト　　ボビー・サンズがメイズ刑務所の壁に糞を塗りたくり、街のあちこちで爆破のかわりにくだらんデモがわきおこっていた頃。

あの頃、私はまだティーンエイジャーで、フュージャリア連隊の一員だった。入ったばかりの陸軍の生活が早くも馬鹿馬鹿しく感じられ、S A Sの選抜試験セレクト・シミュレーションを受けるかどうか、悩んでいた頃。

その日も、くだらないことこの上ない一日だった。

ビーチマウントの集合住宅の屋根に飾りつけられた三色旗をおろせ、という命令を受けて、どしゃぶりの中を出動した私達パトロール部隊を待ち受けていたのは、同行していたサラセン装甲車の故障だった。

搭乗員がぶつぶつ言いながら下車し、休憩時のための紅茶を運ぶ用しかなさない我らが鋼鉄の守護神のご機嫌をうかがう。私達歩兵はL 1小銃を手に、あたりの哨戒にあたる。

大粒の雨が、ポンチョを叩く　　雨の日は好きだった。大嫌いな、羽根飾りのついた間抜けなベレー帽も、ポンチョを着ていれば見られることはない。

モリイが声をかけて来たのはそんな時だった。街路のあちこちに目をくばりながら、基地に帰ってチップスを喰うことばかり考えていた私は、ぎょっとして発砲してしまいそうになった。

立っていたのは、年端もいかない　　まだ、学校にも行ってない年頃の少女だった。この雨の中、傘もささずに私の前に立ち、ずぶ濡れのままこちらを見上げている。真っ黒な髪と、はしばみ色の瞳。つぎだらけの赤いアノラックは、すでにたっぷりと水を吸って重たげだった。

『……寒くないのか？』

私は、まずそんなことを聞いた。少女は震えながら、小さくうなずいた。

『ガキでも気をつける。爆弾を持つてるかもしれねえ』

私の横にいた“グリーンベレー・ガズ”二等兵が、訳知り顔でささやく。

私は奴をひとにらみしただけで、それ以上の言葉を封じた　　ヴェトナム戦争映画のマニアで、その影響で陸軍に入隊したこの馬鹿野郎は、数ヶ月前に“ゲーク”（アジア人の蔑称）という言葉の口にして私に叩きのめされて以来、私を恐れはばかっていた。

『だったら、早くうちに帰りなさい』

まだ少年の域を出ず、その事実には羞恥に近いものを感じていた私は、せいっぱい、年長者ぶってそう言った。

その言葉を聞くや、少女は大きく首を横に振った　　その振り方はあまりに激しく、家に帰りたくないよほどの事情があることが、たやすく察せられた。

『だったら……』

そこで、言葉につまった。陸軍の訓練プログラムは、家に帰りたがらない少女を目の前にした時の対処法については、何も教えてくれていなかった。

窮して、小隊長の指示をあおごうとしたが、彼は顔を真っ赤にして無線でがなっている最中だ。いま、「この女の子、どうしたらいいですか？」なんて訊いたら、たぶん私は前歯をなくすことになるだろう。

『こいつをやれ』

気をきかせた小隊つき軍曹が、私に予備のポンチョを投げ渡した。礼を言ってから、冷た

い雨でかじかむ手でその包装をといて、少女に着せてやる。少女はしつけのいい子犬みたいにおとなしく、私にされるがままになった。

『コンテナの紅茶もくれてやれ。……どうせ、しばらくは動けん』

うんざりした声で、軍曹は続けた。無愛想だが気のいい小男の彼に、私は訊いた。

『旗をおろす任務の方は……』

『今小隊長が本部と話をつけてる。うまくいけば、グリーン・ジャケットの連中に代わってもらえる』

私は駆け出し、サラセンの後部コンテナを開け、そこにある紅茶をマグカップについて、少女のもとに駆け戻った。任務中の移動は、すべて駆け足だ。

少女は湯気の立つマグカップを両手で持ち、何度もふうふう吹いた。一口飲んでから、不思議そうに顔をあげる。

『あなた、ほんとうにイギリスの兵隊さん？』

妙なことを訊いてきた。

『当たり前だろ。……なんで、そんなことを訊く？』

少女はちょっと困った顔をした。また一口飲んで、うつむいたままぼつりとつぶやく。

『だって、ママがイギリスの兵隊は、みんな悪者だって言ったから……』

苦笑した。カソリック家庭での一般的な教育。母親の言葉が世界の真理である、この年頃の子供にとって、いま自分に起こっている事態は信じられないことだろう。悪魔に等しいはずの英軍兵が、ポンチョと暖かい飲み物をくれるという事態は。

『悪者だと思っていたのに、何で声をかけてきたんだ』

からかうつもりで、そう訊いた。

少女はすぐに答えず、紅茶を飲み続ける。マグカップの中に落ちる雨粒を防ぐために、私はポンチョの袖で少女の頭上をおおう。

『さらってほしかったから』

少女は、言った。

『ママが、イギリスの兵隊が子供をさらうって言ってたの。それで、さらってもらおうと思って……』

そこで気づいた。マグカップを持つ少女の手の甲にある、丸い火傷のあと。誰がどう見たって、煙草を押しつけた跡だ。それがいくつもあつた。やったのは、彼女の“ママ”であることを、何故か私は確信した。

『……ここから、どこか別の場所に行きたかった？』

少女はこくりとうなずいた。私は首を振った。

『残念だけど……俺達は子供をさらったりしない。君をどこかに連れて行くこともできない』

君はこのくすんだ街から逃げることもできず、ここで年をとり、死んでいくんだ。その言葉は、さすがに飲み込んだ。現在にも負けず劣らずの皮肉屋だった私だが、こんな子供を、非情な現実と直面させるほどのサディストでもなかった。

少女は、そう、と悲しそうにつぶやくと、紅茶を飲むのをやめ、小さくせきこんだ。

『イギリスに連れて行ってほしかったな』

そのつぶやきには答えられなかった。この歳で、自分を取り巻く世界に絶望し、見知らぬ

異国へ逃れたいと望む少女　　今さらながら、赴任した土地の現実を思い知らされた気がした。

『たいしていい所でもないぜ』

軍曹が、両手にマグカップを持って立っていた。自分と、私のぶんということだろう。気づけば、小隊の半分はサラセンのうしろで紅茶を飲んだり、煙草を喫ったりしていた。交替で小休止することにしたのである。

マグカップを受け取り、少女の目線に合わせてしゃがむ。

『俺ができるかどうかは分からない。……でも、君が大人になる頃には、世界は変わる。必ず変えてみせる』

まっすぐに少女の目を見て、確信をもってささやいた。

今にして思えば、何も分かっていない子供のたわごとだと思うだろう。しかしその時の私は、真剣にそう誓っていたのだ。幾人もの仲間を、爆弾や銃撃で失っていた私は、真摯にこの世界を変革し、善導する役割を演じたいと、思っていたのだ。

当時、私は知らなかった。世界は絶対に変わらないことを知らなかった。人間がいる限り、この世に暴力と悪徳と不条理が絶えないということを知らなかった。

何も分かっていなかった私は、銃を手にしてばたばた駆け回ること、何かを為せると信じていた　　暫定派の殺し屋どもの発想と、たいして違いはしない。

それでも少女は嬉しそうに微笑んだ。ありがとう、と小さくつぶやいた　　あれは、何に対する礼の言葉だったのだろうか？

少女はモリイ・マコリガンと名乗った。

しばらくのあいだ、紅茶を手にとあいもない話をした。

イギリス兵はいつもお茶を飲んでいるのかと訊かれた私は、毎朝飲まされているライム味の粉末ジュースの話をした。悪意すら感じるほどまずいその飲み物のことを面白おかしく話ると、少女は声をあげて笑った。

そんな調子であれこれ話していると、モリイがだしぬけに言った。

『やっぱり、あたしイギリスに行きたいな。イアンと一緒に、イギリスに行きたい』

話が、また面倒なところに戻ってきて、私が返答に窮していると、軍曹が助け舟を出した。

『だったら、早く大きくなるこった。そしたら、こいつと結婚してイギリスに来ればいい』

少女は力強く、うん！とうなずいた。同時に、まわりの連中からの冷やかしの声がふってきた　　どうやら、みんな聞いていたらしい。

『約束よ、イアン』

私はさらに窮地に追い込まれた。口先だけの約束で、この場をしのぐのならば、話はひどく簡単なのだが……疑うことを知らないような、無垢な瞳を前にしては、かえってそれもためらわれた。

できない約束は、したくなかった。約束するのなら、それを守りたかった。ことに、この少女相手には。

『……だめなの？』

不安そうに、少女は訊く　　その時、サディスティックな神が、ねじけた奇跡を起こした。

重く、腹に響くような爆発音が聞こえた。数キロ先　　間違いなく、ビーチマウントの

方角からだ。

『ひっかかっちゃまいやがったな』

大きな舌打ちとともに、軍曹が吐き棄てた。それで、何が起こったのかを理解する。

くだんの三色旗は、畏だったのだろう。英軍兵が引きおろすことを見越して、そこに爆弾がしかけられていたのだ。古典的なトリック　それでも人は死ぬ。

『軍曹。八人ほど連れて現場に向かえ。ここは、私がおさえる』

きびきびした口調で、小隊長が命じた。即座に軍曹がそれに応じ、私に顎をしゃくる。どうやら、私は現場でグリーン・ジャケッツのミンチに直面する一人に選ばれたらしい。

『イアン……』

モリイはひどくおびえた顔をしていた。私は彼女の両肩に手を置くと、静かに　そして最大限の威厳をもってさとした。

『モリイ。ここは危険だ。早く、うちに帰りなさい』

内心のどこかで、先程の“約束”がうやむやになってしまったことに安堵していた。私は自分を軽蔑した。この少女に軽蔑されないよう、神に祈った。

『急げ！』

軍曹の怒号。少女の返事を待たず、駆け出す。

『イアン　』

細く、悲痛な叫びが、背後から聞こえる。私はさらに走る速度をあげた。

少女は何度も私の名を呼んだ。私は振り返らなかった。

それ以後、S A Sに入隊するまでの赴任期間のあいだに、モリイに会うことはなかった。私は思う。

あの時、約束をしなくて本当に良かった。

あの時、モリイを知らなければ、もっと良かった。

十数年後、私はモリイと再会することになった　　考えうる、最悪のかたちで。

その時、私は熟練のS A S隊員として、絶対に公にできない任務を帯びて北アイルランドに舞い戻った。

当時すすめられていたI R Aと英政府の停戦交渉に反意をいなく、一部のはねあがり連中が大規模なテロを企てている、という信頼性の高い情報が、何故かI N L A（アイルランド民族解放軍）の大物密告者から入った　　その事態に対して“最善の処置”をすべく、私達のチームはアルスターに送られたのだ。

与えられた任務は恐ろしくシンプルだった。テロに使用される武器の隠匿場所にひそみ、それを取りにやって来る活動家達を皆殺しにする。それだけだった。

その場所に武器を取りに来る日時、及び顔ぶれも分かっていた。カーゾン・ストリートの盗聴屋が、うまいことやったのだ。

何もかもが順調で、あとは実行するだけだった。

我々は勝利を確信しながら、その隠匿場所　ダンガノン郊外の使用されていない納屋で待ち伏せすることになった。

時は深夜　　暗視装置の必要がないほど、明るい月夜。

我々は完全武装して、くだんの納屋の近くにある藪にひそみ、連中が来るのを今か今かと待ち受けていた。

やがて、車道の方から、フード付きのコートですっぼり顔をおおった人物が、あたりを警戒しながら納屋の方に向かってきた。おぼつかない足取りで、明らかに怯えている。察するに、こういうことには慣れていない奴が、斥候役にされているのだろう。

私のかたわらにひそんでいた同僚のパットも、私と同様の結論に達した。ボディランゲージで、合図してくる　　静かに殺せ、イアン。

うなずいた。そして斥候役が近づいてくるのを待つ。

そいつが私達のひそむ藪の前を通り過ぎると同時に、ナイフを手にして、そっと背後にしのびよる。

斥候役は私に気づかない。目の前でゆれるフードの後頭部を見ながら、音もなく襲いかかる。左手で口をふさぎ、右手のナイフで喉首をかき切る。切り開かれた気管から、鮮血と笛じみた音を出しながら、そいつはもがいた。間髪いれず、今度は延髄をえぐる。

斥候役の動きが止まった。もがいていた肉体が一瞬にして力感を失い、ぐったりともたれかかってくる。完全に、こときれたようだ。

自分の手際によさに感心する暇もなく、そいつの両脇に腕をさしいれ、先程までひそんでいた藪の中にひきずっていく　　あとに続いて来るであろう、本命の標的達に、この死体を見せるわけにはいかない。

その時、死体の顔を口元まで隠していたフードがぬげ、月光に照らされた死者の相貌が明らかになった。

斥候役は男ではなかった。

まだ若い　　少女とっていい年頃の、女。

長い黒髪と、美しい　　そして見覚えのある顔だち。

手の甲にいくつもある、丸い火傷。

モリイ。

思わず、飛びのいていた。叫び声が出そうになって、とっさに血に濡れた左手で口元をおった。口腔内にひろがる、モリイの血の味　　妙に、甘く感じた。

かつてベルファストの路上で出会った少女は、喉首をかき切られた無残な姿で、いま、私の前に横たわっている。首から下が大量の血にまみれていたが、何故か顔にはほとんど血液は付着しておらず、驚愕の表情のまま凍りついた白い顔が、月を見上げていた。

以後のことは、ほとんど覚えていない。

それからしばらくして、予定通りに現れたIRAの活動家を四人殺害したはずだったが、私があの日のもので覚えているのは、モリイの白い死に顔と、彼女の血の味だけだ。

結局、モリイが何故、あの時あの場所にいたのかは分からずじまいだった。

暫定派のシンパとして斥候役を買って出たのかもしれないし、あるいは単に、不幸な偶然によって、あそこに居合わせてしまっただけかもしれない。

とにかく、その一件のために、私はSASを退役せざるをえなくなった。任務の性質上、私が軍法会議にかけられるような事態にはならなかったものの、さすがに無辜の市民を殺して、“連隊”も笑ってすませてくれはしなかった。

私は第二の故郷であったヘリフォードを去り、母の生誕地であるグラスゴーに行った。そして、そこで一年ほど隠遁生活を送り……また元の人殺し稼業に舞い戻った。

もうひとつ、覚えていることがある。

任務の数日後、パットは私をパブに連れて行き、うんざりするほどエールをおごってくれたあと、なぐさめの言葉をかけた。

『気にするな。よくあることだ』

そう　確かに、よくあることだ。二十余年前、英軍がこの地に進駐して以来、この手の出来事はいくらでもあったのだ。

しかし、年端もいかない少女が喉笛を切り裂かれ、それが“よくあること”で片づけられる世界

そんな世界とは、いったい何なのだ？

それが93年のことである。

思えばあの時が、こういう生き方から足を洗う、最後のチャンスだったのかもしれない。

しかし現実には、そうはならなかった。私は、国際秩序の観点からいって、国家が本来介入するべきではない事態　ようするに、より悪質な汚れ仕事をして生きることになったのだ。

それについては、誰を責めるつもりもない。天上にありし神のサディズムには反吐が出そうだが。

私は、完全に自分の意志でこういう道を選んでいるのだ。後悔がないといえば嘘になるが、こういう生き方しかできないのは事実だし、したいとも思わない。

自身に関してはそれでいい。が、モリイの件は、割り切ることも、忘れることもできない
できたらできたで、私は自分を憎むことになるだろうが。

そんなことを考えながら、歩を進める。

すでに先程のまじない通りを出て、今いるのはだだっぴろい公園のような草地。そこには、珍妙な形をした建物が、ぼつりとあるだけだ。

闇雲に歩き続けて、迷子になるのも馬鹿馬鹿しいので、背後のフィリーに訊く。

「フィリー、ここはどこだ」

気絶から覚めたばかりの妖精は、また顔をさすりながら私の方を見た。そして恐ろしく不機嫌な声で応じる。

「……アンタ、人を地面に叩きつけといてその態度は」

「ここはどこだ」

繰り返した　フィリーより十倍は不機嫌な、殺意すらこもった声で。不承不承、妖精は答えようとした。

「ここはね、魔法の……って、あれ、あの人見てよ！　あいつあいつ！」

いきなり大声を出したフィリーの指し示す先には、一人の男が立っていた。

【まアだ続きます】